枕草子　清少納言

作者の四季の感じ方を読み取ろう。

（作品について）

枕草子

・平安時代中期に清少納言が書いた随筆。

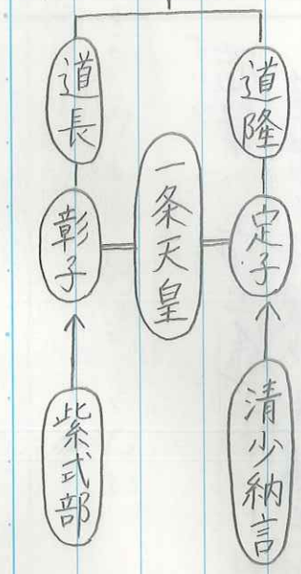
・清少納言が宮仕えをしていた頃見聞きしたことや、季節の感想、人生観などを書き記したもの。

・同じ時代に成立した作品
紫式部『源氏物語』

（作者について）

清少納言

・一条天皇の中宮定子（てい）に仕えた。
高い教養を備えていた。



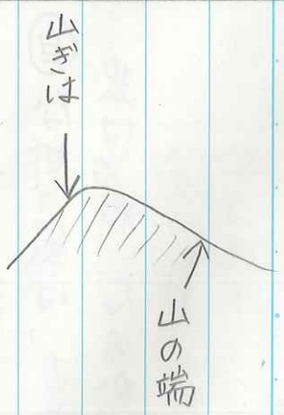
随筆（ずいひつ）（エッセイ）
筆者の体験や見聞を題材に、感想を交じえ記した文章。

宮仕（みやづか）え
宮中に勤めること。

（本文）

春はあけぼの。やうやう（ようよう）白く
なりゆく山ぎは（わ）、すこしあかりて、
紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、
闇もなほ（お）、蛍の多く飛びちがひ（い）たる。
また、ただ一つ二つなど、ほのかに
うち光りて行くもをかし（お）。雨など
降るもをかし（お）。



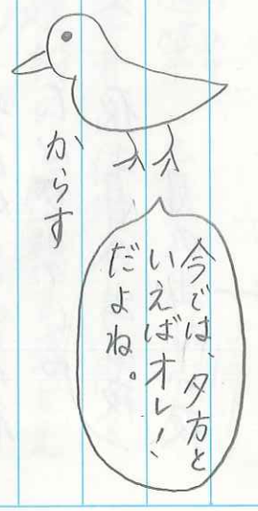
春
・あけぼの
・だんだん白んでいく
山ぎわ
・紫がかった雲が細くたなびいている

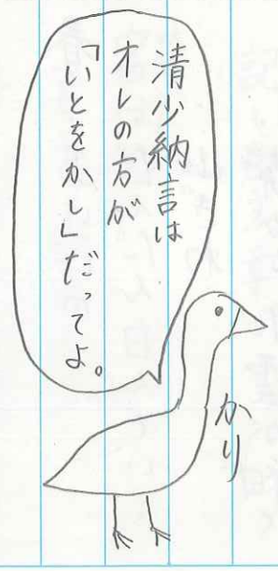
夏
・夜　月の出る夜
月の出ない夜
←
蛍が多いのも
少ないのもをかし

・雨

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近くなりたるに、鳥の寝どころへ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへあはれなり。まして雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし。日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

秋・夕暮れ
・鳥　あはれなり
・雁　いとをかし
・風の音、虫の音





(自) なぜ、風は「おと」で虫は「ね」なのか。

冬はつとめて。雪の降りたるは言ふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火などいそぎおこして、炭もて渡るもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりて、わろし。

冬・つとめて
・雪、霜
○・火をおこして炭を持ち廊下を渡ること
×・昼に火桶が灰ばかりになる

(自) 寒いのに朝が良いなんて共感しにくい。「わろし」で完結しているから、きっぱりと嫌だと言い切っている感じ。

(課) 清少納言が四季の中でお気に入りを見つけているとわかった。

(次) 自分流「枕草子」を書く。